

猫<sup>ねこ</sup>神<sup>がみ</sup>様<sup>さま</sup>  
システム

昔々、文明がちょっとだけ発達した頃。

毎年氾濫に悩まされながらも豊穰をもたらしてくれる河の畔に、猫神様を祀る街がありました。

その街に住む神官と、それに仕える兵士のお話。

## 第一章 告白

猫神様を祀る神殿。そこに神官長である少女は住んでいた。まだ幼さが残るか弱い彼女を守るのは、彼女直々に選んだ一人の男兵士。

神官長に呼ばれた彼は緊張した面持ちで、白い石で出来た、それで居ながらも少しぬくもりのある彼女の部屋へと入る。

「ミエ様、何か御用でしょうか？」

神官長に呼び出されたと言う緊張からか少しこわばった彼の声を聞いて、彼女、ミエが軽い足音を立てながら駆け寄ってくる。

「良く来てくれました。」

あの、私、セイタさんに伝えたい事があって……」

目の前で顔を赤くし、俯いてもじもじしているミエを見て、セイタと呼ばれた兵士は戸惑いを隠せない。

伝えたい事というのは何なのだろう。

そう思いながらも、自分から訊ねる事も出来ず、しかし視線は外さずにじっとミエの言葉を待っていたら、彼女が意を決した様に両手を握り

しめてこう言った。

「私、セイタさんの事が好きなんです！」

それを聞いたセイタは思わず身を固める。

彼としても、決してミエの事が嫌いな訳では無い。

神官長で有りながらも可憐さと儂さ持ち、それと同時に芯の強さを持ったミエに対して、セイタ本人もほのかな好意を持っている。

けれどもセイタはミエに選ばれたとは言え、本来なら彼女に声を掛ける事すら憚られる一介の兵士でしかなく、ミエとは越えられない壁の様な身分差が有るのだ。

「そうおっしゃいまして、俺とミエ様では身分差が……」

顔をミエに向けたまま、しかし少し視線を外してはつきりとしないう言葉を口にするセイタに、ミエは縋る様な目でこう言う。

「では、身分差が無かったら、私の気持ちを受け入れて下さいますか？」

「そうですね、身分差が無ければ。」

しかし、身分差が有るのが現実でございます」

そこまで言ってセイタははっとする。

自分の不用意な言葉で、ミエが神官長を降りるのでは無いかと言う不安が湧いてきたのだ。

ミエは分別が有り、他の神官や街の人々を統べる事が出来る立派な神官だ。

けれども、如何に大人に引けを取らない事が出来ようとも、未だ激情に身を任せる事も有り得る年頃だ。

それに、セイタとしても神官長で有るからと言ってミエへの好意が消える訳では無いのだ。

「俺としてもミエ様への好意は有ります。けれども、それは周りが許さないでしょう」

セイタの言葉にミエは俯き、声を震わせてこう言う。  
「そう……ですよね。」

では、私とセイタさんの二人だけの秘密で。他の人には知られない様に。

それなら、気持ちを受け取って下さいますか？」  
「秘密にするのと、それと」

「それと？」

不安と期待の混じった視線を受けたセイタは、先程までの緊張と戸惑いを感じさせない様なはつきりとした口調で言う。

「俺の気持ちを受け取って下さるなら」

真剣な眼差しでじっとミエの瞳を見つめるセイタに、ミエは力一杯抱きついた。

その日から、何度も二人は警護という名目の元、ミエの部屋でこっそりと語り合う事が何度も有った。

「所でミエ様」

「なんでですか？」

「前から気になっていたのですが、なんで俺なんですか？」

他にも頼りになりそうな男は沢山居るのに」

その問いに、ミエは少し頬を赤くし、クスクスと笑って答える。

「何ででしょう。」

気がついたら貴方を目で追う様になっていて、それで他の人から話を聞いていたら、家族を凄く大切にしているって話を聞いて。

素敵な人だなんて思ったのは、その話を聞いてからです」

樂しそうに、そして少し夢心地にそう語るミエの言葉に、はたとセイタは思い出した。

ミエは幼い頃から神官になるべく家族から引き離されて育ったのだと言ふ事を。

ミエが寂しい思いをしたのかどうかはわからないが、きっと家族という物がどういう物なのかを知らないからこそ、憧れめいた物を抱えているのかもしれない。

「セイタさんのご家族に会ってみたいです」

「そうですね。」

それでは、いつかお忍びで会いに行ってみますか？」

「本当ですか？ 樂しみです！」

自分の両親という訳ではないが、それでも家族という物に触れられると無邪気に喜ぶミエに、セイタも笑顔を返したのだった。

ある日の事、兵士の仕事の給料として渡された、背丈の半分ほどもある大きな袋二つ分にもなる穀物や乾燥果物を渡されたセイタは休みを取り、それらを背負ったり抱えたりして自宅へと帰っていた。

決して大きい訳では無い、けれどもきちんと手入れが行き届いた家に居るのは、だいぶ前に脚を悪くしたけれども気の良い父親と、その面倒をかいがいしく見る優しい母親。それにせわしなく家事をする快活な妹が二人だ。

「お兄ちゃんお帰り！」

早速出迎えたのは普段料理など、台所の仕事を一手に引き受けている一番下の妹、シェリティ。

セイタに抱きついて喜ぶシェリティの出迎えを受け家の中に入ると、掃除をしていたとおぼしき真ん中の妹、ネテプが箒ほうきを片付けている所だった。

「お帰り兄さん。」

お父さんとお母さんは奥に居るよ」

「ああ、取り敢えず、台所にこれ置いてから奥に行くよ」

大きな袋いっぱい詰まった食料を台所に置くと、早速シェリティが仕分けを始める。

「お兄ちゃん、ちよつと貰えるお給料増えた？」

「ああ、ミエ様のお付きになったから、少し昇給した」

シエリテイとセイタの会話を聞いていたネテプが、少しからかう様な顔をしてセイタの事を小突きながら言う。

「お付きになったのは良いけど、みっともない所見られない様にしてね」

「お前俺が神殿でどんな目で見られてると思ってるん？」

「んふふ、冗談だって。」

でも、兄さんって肝心な所で手を抜く癖があるからそれは心配かな」  
「自覚はあるから善処する」

そんな話をしている間に、奥の部屋から母親と杖をついた父親が出てきた。

ミエ様のお付きになるとは光栄な事だなあ。と素直に喜ぶ両親。

両親と、掃除の終わったネテプと、セイタの四人で部屋の中に座って話をしている間にも、シエリテイは早速乾燥果物を酒で茹でた簡単なおやつを作り、出来上がった物を家族揃って尽きる事のない話と共に食べたのだった。

そしてその日の夕食を家で食べたセイタは、すぐに兵舎へと戻った。

ミエのお付きとなった以上、余り神殿の外に居る訳にはいかなかったのだ。

月が濃紺の空に輝く様な時間。もう寝ているかもしれないと思いつながらもどうしても気になったのでミエの部屋へと行くと、部屋の前には代わりの兵士が立っている。

「お勤めご苦労様です」

「これはセイタさん。もう戻っていたんですね。」

「何だかミエ様の元気が無い様なので、様子を見てくれませんか？」

「ミエ様が？」

「わかりました。失礼します」

兵士の言葉に心配が湧き上がったので軽く挨拶をしてミエの部屋に入ると、固い石で出来た寝床の上で、入り口に背を向けて丸まっているミエが居た。

「どうなさいました？」

寝ているかもしれないと思いつながらも声をかけると、少し驚いてくれるけれど安心した様な顔をしたミエが、セイタにうつつすらと涙のにじんだ瞳を向けた。

「今日は、ご実家に泊まってくるのでは無かったですか？」

「いえ、ミエ様のお付きになった以上、余り長い事神殿から離れるのは良くないと思って、夕食を食べたらすぐに戻って参りました」

セイタの答えに、ミエはむくりと起き上がり、濡れた目を擦る。

それを見て、セイタが問いかける。

「もしかして、俺が居なくて寂しかったんですか？」

ミエは黙って頷く。

暫くそのまま二人とも黙っていたのだが、ふとミエがこう言った。

「こういう時は、頭を撫でたり抱きしめたりしてくれる物なのではないのですか？」

少しむくれた顔で言われたその言葉に、セイタは顔が熱くなるのを感じながら答える。

「そうはおっしゃいまして、やはり神官長であるミエ様に触れるのは畏れ多いというか……」

「やっぱり、私の事は神官長としてしか見られないのですか？」

少し拗ねたような声を出すミエに、セイタはしどろもどろになりながら言葉を重ねる。

「いえ、その、そう言う訳では無いのですが、周りからヘタレと呼ばれている俺としては、ミエ様が神官長で無くても、女性と言うだけで、その……」

「妹さんが二人も居るのにですか？」

「あの、二人も居るから、余計に……」

妹が二人もいるからこそ女性の事がよくわからず、どうやって大切にしたら良いかで戸惑い、俯いて狼狽えるセイタ。

その胸にこつんと何かが当たると。

「もう少し勇気を出して下さい」

セイタの胸に額を当てたミエは、自分よりも年上の男性なのに可愛い所もあるのだなと思いつながら、そう言って抱きついた。

## 第二章 祭り

街の近くの河が見渡すほど広い地面を覆い尽くすように氾濫した後、水が引き河が運んできてくれた恵みで農作物を植えるのに適した時期になった頃、ミエの統べる街と、少し離れた所にあるもう一つの街の神官達で、共に豊穰ほうじょうを願う祭りを行う。

華やかな飾りと純白の祭り用の衣装に身を包んだミエと、他の神殿の神官長メテイトが、シストルムと呼ばれる、水牛の角を線で繋げたような形をした青銅の楽器を鳴らしながら、河辺で祈りを捧げる。

神を讃え豊穰を感謝する長い祈りが終わり、二人は祭り装束に身を包んだ多くの神官達を引き連れて神殿へと戻る。

毎年お互いの神殿を交互に訪れているのだが、今年はメテイトの治める神殿に向かう。

色鮮やかな絵画の装飾が多いミエの神殿とは違い、メテイトの神殿は飾り気が少なく、重々しい石がむき出しになった剛健質実な作りだ。

その代わりに、メテイト達が崇めている河馬神かばがみ様の像には、いくつも

の煌びやかな、比べてみるならば青い宝石が多いが、赤や緑など、色とりどりの宝石が詰め込まれている。

そんな神殿の中では、神官達が酒や乾燥果物を各々手に取り、賑やかな宴を催していた。

この様な宴は高い地位に居る神官達にとっても滅多に有る物ではない。

国を統べるファラオは、自らの権威を示す為に宴を開く事が多いのだが、神官は神に仕える者としてあくまでも質素に生活する事が常だ。

そのような訳で、稀とも言える神官達の宴にも拘わらず、ミエはなにやら落ち着かない様子できよろきよろしている。

「どーしたのミエちゃん。

構ってくれなきゃあたしさびしい」

「メテイトさん……」

うっ、お酒臭っ！ 相当酔ってますね」

顔を真っ赤にしてぐでぐでになりながら絡んでくるメテイトに、ミエはすかさず水を渡す。

渡された水も酒だと思ったのか、メテイトはまだまだ行くよ。などと威勢のいい事を言いながら少し乱暴に杯を受け取り、一気に空ける。水だったと言う事に気づいたかどうかはわからないが、少し落ち着いて一息ついたメテイトがミエにこう訊ねる。

「誰か探してるの？」

その問いに、ミエは思わず俯いてしまう。

その様子を見たメテイトはにまりと齒を見せて笑い、意地悪くミエの頬をつつく。

「もしかして恋人？ 恋人でも出来たの？」

「えっ？ あの、その」

「でも、神官長ともなると自由な恋愛なんて出来ないからね。」

どの神官をおすすめされたの？」

「どうやらメテイトは、今までの神殿の慣習にない、ミエが他の神官とお見合いでもした物だと思ひ込んでいる様子。」

ミエは微妙にメテイトの認識がずれているのを良い事に、お見合いがあったのかどうかと言う事実すらからも話題を逸らし、恋人の話をうやむやにしてしまう。

そして、お酒を一口飲み、少しだけ寂しい想いを胸に抱え、部屋の外で待機しているセイタの事を思い浮かべた。

……こういう時、一緒に居て欲しいな……

しかし、そうは思ってもミエとセイタの間には神官と兵士という身分の壁がある。

尚且つ、二人の気持ちは二人の間だけの秘密と言う事になっているのだ。

二人だけの秘密というのは、甘酸っぱい物ではあるのだが、少しだけ窮屈に感じる。

寂しさと、そこはかと無く感じた窮屈さで思わず暗い顔をするミエの肩をばしばしと叩き、メテイトがミエの顔を覗き込んで心配そうな顔をしている。

「ミエちゃん。どした？ 元気無いぞお。」

そうだ、こないだ献上された宝石見せたげる。

それ見たらきつと元気出るよ！

ちよつとこのアンタ持って来てくれない？」

メテイトがミエに抱きつきながら部下の神官にそう言いつけると、一

旦那屋から出た少し足取りのおぼつかない神官が、柔らかな布に嚴重に包まれている、親指の爪位有る真珠を幾つか持って来て、メティトに差し出した。

それを見たミエは、思わず目を丸くする。

「こゝ、こんな大きな真珠がいくつも……」

これは一体どこから？」

「猫神様の權威もなかなかの物だけど、河馬神様も負けてないって事よ。」

ほらポチャン」

「あーっ！」

ミエでさえ滅多に見る事の無い貴重品である真珠。それをメティトはいくつも持っている上、その内一つをミエの杯に満たされた酒の中へと放り込む。

小さな水面に、大きな波紋を作って沈む真珠。

これはミエにしてみれば、常軌を逸した状況だ。

思わず顔を青くするミエの横で、メティトは自分の杯にも酒と真珠を入れる。

「最高のお酒でガッツ付けよう！」

「は、はい」

真珠の入った酒をあおるメテイトを見て、これは彼女なりの励ましのだろうなど、ミエは解釈するが、それと同時に、数刻後に彼女は全部吐き出しているのだろうなど、メテイトが暴飲する様を見守ったのだった。

宴が終わり翌日。

宴が終わった後、酒が入った神官が沢山居る状況の中、すぐに少し離れた自分達の街に戻るのには難しかったので、一泊した後、メテイト達の街を離れた。

道すがら、ミエは牡牛が引く幕の掛かった輿に乗りながら、宴の後の事を思い出していた。

案の定、宴の後メテイトは酒の飲み過ぎでリバースしていたのだが、よれよれになったメテイトを部屋に送った後、ミエの為に用意された部屋へ案内してくれたのは、メテイトの部下の兵士と、宴の間外に控えていたセイタだった。

ミエもセイタも、お互いの気持ち表情に出す事無く部屋まで行ったのだが、ミエが部屋に入る直前に掛けられた、「おやすみなさい」と言うセイタの一言。

それがどうしようも無く優しく、愛おしく聞こえたのが印象に残っていた。

早く自分の街に戻りたい。そうしたらもう少し、今は幕の外で歩いているセイタと話す時間が増えるのに。そう思ってミエは少しだけ目を伏せた。

自分達の街に帰ってきたミエ達は、街の人々に歓迎されながら神殿へと入っていく。

ミエは神殿に入り、服を着替え頭の冠も変えて身嗜みを整えると、兵士達を神殿の広間に呼び、宴を開いた。

先日の神官達で行った物の様な大仰な物では無かったが、酒と、多少の食べ物を振る舞う。

ミエの目の届く範囲に、セイタは居た。

じっとして酒も余り飲まず、饗きやうされた乾燥果物にも余り手を付けて

いない。  
心なしか俯いている様なその姿を見て、少しだけ不安になった。

その日の晚いつもの様に、周りには他に誰も居ないミエの部屋の前に控えているセイタ。

ミエは彼に何故宴の時に酒を飲んでいなかったのか、もしかして体調が悪いのかと、ずっと不安に思っていた事を訊ねた。

すると、セイタは少しだけ気まずそうな顔をして答える。

「いやあ、昔飲み過ぎて失敗した事があって、それ以来慎重になっているんですよ。」

それに……」

「それに？」

じっと不安そうな視線を送るミエの手を、セイタがそっと握って言った。

「酒が飲めない事よりも、酔いつぶれていざという時にミエ様をお守り出来ない方が嫌ですから」

真っ直ぐに目を見据えて言われたその言葉に、思わずミエの頬が熱

くなる。

それから、周りを何度も見回した後、おずおずとセイタにこう言った。

「それなら、ぎゅってしてください」

「……酔ってますか？」

「私は呑んでませんよ」

「俺、少し酔ってるんでどうなるかわかりませんよ？ 良いですか？」

どうなるかわからない。その言葉を聞いて、ミエは思わず胸が締め付けられる。

「貴方の好きに……して良いですよ」

「そうですね。それでは失礼します」

この後どうなるのか、期待と不安が入り交じる中セイタの腕に包まれる。

その数秒後、余りにも強く抱きしめられすぎて、ミエは思わずギブアップの声を上げてしまったのだった。

その翌日から、神殿は神官も兵士も通常通り、業務を積んでいく質素な生活に戻った。

昼食後、ミエが何とも無しにセイタを連れて神殿内を見て回っていると、神官達の休憩所になっている、石畳が敷かれて木の植わった庭から、ふとこんな会話が聞こえた。

「メテイト様の所の宝石凄かったね」

「綺麗だったよね。私もあんなの欲しいな」

「でも、宝石なんて言う高価な物、私達みたいな下っ端神官じゃ買えないし」

「諦めるしか無いかなあ」

やはり神官といえども女の子は、ああいっただ綺麗な物が好きなのだなど、ミエは会話をしている二人組をそっと見送った。

神殿内を一周した二人は、ミエの部屋へと戻り話をしていた。

「ミエ様も、宝石に興味がおありですか？」

先程の神官の会話が気になったのか、セイタがそうミエに問いかける。

それに対してミエは、微笑んで言葉を返した。

「無いと言えば嘘にはなりますけれど、私は宝石よりもセイタさんが

側に居てくれる方が嬉しいです」

するとセイタは黙って俯いてしまう。

何かと違って覗き込むと、顔が真っ赤だ。

私よりも年上なのに、随分と可愛い所があるのね。等と思いが  
ら、ミエはセイタの頭を撫でた。